

西郷信綱著『壬申紀を読む』

『日本古代文学史』（岩波全書改稿版一九六三年）、『日本文学の方法』（未来社一九六〇年）、『詩の発生』（未来社一九六四年）、『古事記注釈』全四卷（平凡社一九七六年～一九八九年）等々の著作によって古代文学に新しい光を当ててこられた一方、『日本文学の古典』岩波新書第二版（一九六六年）などで多くの人々に知られている西郷信綱氏が、昨年の六月『壬申記を読む』を出版された。『古事記注釈』執筆中「やはり壬申の乱とまともに付きあつてみなければなるまいという思いが次第に募っていった」（本書「あとがき」）結果だといわれる。

壬申紀とは日本書紀卷第二十八 天武天皇紀上を指す。この部分は壬申の年（六七二）の最大の事件、壬申の乱の記述がほとんどである。壬申紀とよばれるこの部分の記述には、日本書紀全体と異なるリアリティーがあるといわれている。記述の素材に壬申の乱に従軍した舎人の手記や大伴氏の家記があったとかんがえられ、それが記述にリアリティーを与えたものと思われる。

本書で西郷氏は日本古典文学大系本『日本書紀』下収の

壬申紀本文を一節ずつ掲げてまことに丁寧によみすすめる。そのよみ方はサブタイトルが示すように「歴史と文化と言語」の問題としてである。西郷氏は「序」の「壬申の乱にどう近づくか」、巻末「補論」二の五などで壬申の乱への近づき方を示されている。

壬申の乱についての研究は多く歴史家によってなされてきた。そして北山茂夫『壬申の内乱』（岩波書店 一九七八年）、田中卓『壬申の乱とその前後』（図書刊行会 一九八五年）、直木孝次郎『壬申の乱』（塙書房 一九六一年、増補版 一九九二年）、等のすぐれた業績がある。古代史の中で壬申の乱を論じたものも多い。

そうした中で文化の問題としてとらえる西郷氏の視点にユニークさがある。氏は壬申の乱が、王位継承をめぐる起こった内乱であるから、従来政治史・事件史として扱われてきたのは当然だとされながら、壬申の乱そのものがそれまでの王位継承事件と「質を異にする独自の性格」をもち、それを把えるには既成の学問領域に収まりきれない「奥行と厚み」をもっている故に、「壬申紀を真に読むには、仕切りの隔壁を何とか取り払い、複数の領域に踏みこんでゆくという困難が課せられる。」といわれる。そこで文化という視点がでてくるのである。

西郷氏は初期万葉の歌の独自性を早くから論理化されてこられた方だが、壬申記に取組まれたのもそこから出ている。前にのべたように氏は壬申の乱を「たんに政治上の事

件という狭い枠」の中に見る「従来のやり方」を「あき足らぬ」とし、一方では万葉集の歌を「即自的に享受するだけ」の「やり方」にもまた「あき足らなくなった」とされる。壬申の乱を「万葉の歌のいわゆる『歴史的背景』とする見地」も「作品とその歴史的背景という図式を見ている古い思考法」と評し、それを「解体」させ、「万葉の歌の姿をもっと根源的に、つまりラディカルにとらえる新たな視野を開く」ことを目指している。

『壬申紀を読む』はきわめて刺激的な書であるが、とりわけわたしが興味をそそられたのは、壬申の乱を経験した世代とその後あはちまのころの世代、例えば、安八磨郡の湯沐令ゆのみのかしであって、大海人皇子の側につき、目ざましく働いて「將軍」とよばれるようになった多品治おほのほむぢと、その息子と考えられている太安万侶の問題をとりあげておられるところである。太安万侶はいまでもなく古事記撰録者である。地方豪族の子弟が文字を知りはじめるのは中央との接触の中ことで、大宝令以後は国学が設けられることで、急速に識字層がつくられていくと考えられるが、壬申の乱当時はまだ少数の識字者がいたにすぎなかったようである。父多品は武人として生き、次の世代の安万侶は文人として生きた。西郷氏は壬申の乱をこうした生活構造、文化構造の激変をもたらしたものと見て大伴安麻呂と旅人、高市皇子と長屋王、藤原鎌足と不比等父子の間を考えられることを示唆される。余談だが私は読みながら、一九六〇年代後半からはじまった

経済高度成長を境とする、わたしたちの生活、文化構造の変化、第一次産業の親からの第二、三次産業への子の流出を思い起こした。歴史に興味をもつ人、万葉の歌に興味をもつ人等も読んでおもしろい本である。（古庄ゆき子）

（平凡社刊 二四七二円）